



Title	「ギリ（ギリ）」の展開について：夕形接続を中心に
Author(s)	岩田, 美穂
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 98-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「キリ(ギリ)」の展開について

——タ形接続を中心に——

岩 田 美 穂

一 はじめに

現代共通日本語(以下、現代語)において(1a)～(1f)のように用いられるキリがある(渡邊二〇〇二より)。

(1) a きりが悪い。

b 爪きりを探す。

c 父は母に家計を任せきりだ。

d 彼は一人きりで生活をしている。

e 彼は部屋に閉じこもったきりだ。

f 彼は家を飛び出していったきり帰ってこない。

現代語においてキリは、(1a)のような名詞用法から(1f)のような副助詞の用法まで非常に多様な用法を持つ。キリは、動詞「きる」「切」または「限」の名詞形「切(限)り」に由来するとされる(此島一九六六、『日本国語大辞典』第二版など)。(1ab)のような名詞用法から発達し、(1c～f)は接尾語(付

属語)や副助詞とされる(『日本国語大辞典』第二版など)。(1c)は動詞連用形に接続し「ずっと～する」のような意、(1d)は「～だけ」のような限定の意、(1ef)は動詞終止形(タ形)に接続し、「～したまま」のような意である時点を境とする意を表す。本稿は、現代語に見られるキリの多様な用法のうち、特に動詞のタ形を受ける(1ef)のような用法が歴史的にどのような過程で成立したかを考察することを目的とする。

なお、現代語においては「キリ」と清音になる(「ッキリ」のように促音を含む場合もある)のが一般的であるが、歴史的には「ギリ」の形で出現することが多い¹⁾。本稿では、「キリ」「ギリ」を異形態とし、以後表記上はキリ(特に区別が必要な場合は「キリ」「ギリ」と書くこととする)。

二 先行研究と問題の所在

二・一 先行研究概観

キリの歴史的变化については、副助詞としていくつかの概説的な記述がある。湯澤(一九三六)を始めとして此島(一九六六)、倉持(一九六九)などがあり、近世前期上方語からこのようなキリの発達が始まったことが指摘されている。近世期以降の通史を詳細に辿った研究として渡邊(二〇〇二)があり、主に意味の面から各用法の派生関係が考察されている。さらに、形式名詞キリの文法化の観点からキリ諸用法の発達過程と用法間の関係を論じたものとして宮地(二〇一一)がある。これらの先行研究によつて、キリの発達、特に(1d)～(1f)のような現代のキリの中心となる用法は、近世後期江戸語において発達することが明らかになっている。

二・二 キリの展開とその問題点

次に、諸用法の発生とその関連性、および構文(文法)面での変化の動機も含め、最も詳細に、かつ、名詞から機能語への文法変化という観点から一連の展開として考察されている宮地(二〇一一)をもとに、キリの史的展開を把握しておこう。

先述のようにキリは(1a)のような名詞用法から形式化(文法化)し現代のような多様な用法を獲得したと考えられている。宮地(二〇一一)によれば、キリの主要な歴史的变化は次の(2)

にまとめられる(二一九頁)。対応する用例を(3)に示す。

(2) ①時空間において「(区)切り」限界・際限」を示す範囲名詞

②時間名詞・空間名詞・身体名詞など一定の上接語に付く形式名詞(形式化・接尾語化)

③述語用法獲得、叙述名詞句の構成(叙述名詞化)

④アリキリ・指示詞+キリ等での副詞句構成

④-1 語彙化 / ④-2 遊離数量詞的副詞句用法

⑤上接要素の拡大(ル・タ形) || 副詞節を構成する形式名詞

(副助詞)化

(3) ⑥否定述語文での再分析(係助詞化)⁽²⁾

①御身いとしにはきりがい。(宗安小歌 宮地二〇一一、用例8)

②墨染ごろものひざきりなるに(高野物語 同、用例9)

③ゆうれい、とんとちからをおとし、あ、もはやおれが命もこれぎりじゃ。(軽口はるの山 同、用例15)

④扱はるゝより樽二つ此酒の有切(ありぎり)にあそぶなれば、(好色一代女 同、用例17)

⑤煩ふなよと云た切(きり)、帰つて行きましたは(春色辰巳園 同、用例37)

⑥私のような人間からはそうきりいえません。(濁った頭 同、用例43)

中世末までに①～③、近世上方語において②③が隆盛し④が萌

芽、④⑤⑥のような文法的性質の大きな変化は近世江戸語・近代東京語において生じたとされる。意味の面では、③の段階において時間・場所名詞や数量名詞を上接語として取っていた用例のうち、(4)のような上接語の解釈が「文脈上小・低」となるものから「限定的解釈」が生じ、特に江戸語において上方語の「ダケ」にあたる限定の副助詞として発達したとする。

権三重帷子

宮地(二〇一一)は資料から詳細に用例を辿り、多様な用法をふまえ丁寧にその段階性を考察しており、概ねのキリ展開として(2)の流れは首肯できるものである。しかし、④から⑤(1f)への展開に関しては、一考の余地が残されていると思われる。

④⑤の変化のポイントは、述語名詞(叙述名詞)を構成していたキリが、(A)近世期に④のような「ありきり」の形で動詞を接続するようになり、かつ、これが「ある範囲」という「分量」を表すことによって、「遊離数量詞的」に副詞句を構成するようになったこと、(B)この分量用法を継起として、「句の包摂」が起き上接要素が拡大、さらにタ形接続が可能となり副詞句(節)を形成するようになったことの二点にある。「ありきり」のような分量を表す用法は、「ダケ」の文法変化にも見られ、他の副助詞の変化と並行的に捉えられる点で、宮地(二〇一一)の説は優れており、示唆に富む。

しかしながら、「ダケ」の変化と同様に「ありきり」を副詞句構

成の継起と考えてもよいのか、という点には疑問が残る。「ありきり」を継起として上接要素の拡大を考える場合、接続形が連用形↓終止連体形(ル形)へ変化したことを想定する必要があり、さらになぜタ形を取るようになったのかに対しても有効な説明とはならない。江戸語においては終止連体形(ル形)に接続した例が見られず、用例上「ありきり」から直接タ形接続に移行しているように見える点も問題である。また、「ありきり」は分量を表すので一定の「範囲」を意味するが、タ形に接続するキリはある「時点」を表しており、キリ自体の意味の相違も説明される必要がある。通史を追う場合、変化の段階が資料上で観察できないということはしばしば起こるが、その点を考慮しても「ありきり」から(1ef)のような用法への変化を直接結びつけるのは難しいように思われる。

そこで、本稿は特にタ形に接続するキリの発達について、他の方向からの変化の可能性について考察する。

三 変化の概要

三・一 調査の概要

本節では、十八、十九世紀の上方語・江戸語の資料(資料の内容は【調査資料・使用テキスト】参照)から「キリ」・「ギリ」を収集し、先行研究をふまえながらその変化の概要をみていく。

キリに見られる振る舞いの違いから、上方語の用例を、一七五〇年(上方Ⅰ期)までと一七五〇～一八〇〇年代(上方Ⅱ期)、江

戸語の用例を、一七〇〇年代（江戸Ⅰ期）と一八〇〇年代（江戸Ⅱ期）のそれぞれ二期に分ける。

先行研究で既に繰り返し指摘されていることだが、キリはその上接語と、構文に偏りがあることが知られている。上接要素は、確認できた用例から、明日、五日などの時間名詞、「千両」のような数量詞、指示語、上記以外の普通名詞、動詞、その他の六つに分類する。次に構文は、キリに助詞が付属し名詞句として使用されるものを「キリノ」「キリニ」「キリデ」、キリが述語で使われるもの「〜キリジャ」（コピュラが現れず述語位置で使われるものも含む）を「述語」、キリが何も伴わずに現れ副詞的に用いられるものを「キリゆ」とし、5つに大きく分類する。以上の区別で調査した範囲での用例を分類した結果を表1、表2に示す。

三・二 上方語におけるキリ

三・二・一 一七五〇年頃まで

表1の結果からみてわかるように、上方語のキリはその初期段階において上接要素は時間名詞が六割以上と顕著な偏りを見せる。構文は助詞ニを伴った形が半数程度を占める。この時期のキリの典型は、「時間名詞+キリ+ニ」であったと考えられる。時間名詞を取る場合、例えば、(5a)では「この三日の間に」「三日間を期限として」といったように、主節事態が成立する何らかの時間的範囲を表す。

表1 上方語のキリの類型（ ）内は割合

計	動詞	普通	指示	数量	時間	上方Ⅰ			
						ノ	ニ	デ	述語
13 (19)	1		1	1	11				
32 (46)	3		2	9	19				
3 (4)			2		1				
10 (14)		2	2		6				
9 (13)					9				
69	4 (5)	2 (2)	7 (10)	10 (14)	45 (65)				
						上方Ⅱ			
4 (18)		1			3				
4 (18)			3	1					
5 (23)			5	2					
8 (36)			6		2				
1 (6)					1				
22		1 (4)	14 (64)	3 (14)	6 (27)				

(5) a この三日限(キリ)に貸したる銀、それを返せといふことと。(曾根崎心中、二・二五頁)

b 先づ昼過ぎより夜半切に、下着の白小袖木綿入れてふくらかし、(野白内証鑑、二七七頁)

数詞の例では、「一番」「二代」などやはり時間に関わるものと、「一座」「一間」など空間、「千両」「二斗」などの量を表すものが

あり、その数量の「範囲」を表す。構文的にはやはり「二」を取るものが最も多い。

(6) a この跡を娘に渡し苦労するかはいさに。一代限(ぎり)に家を捨て、嫁入りさせた親心(大経師昔曆、二・五五九頁)

b 書院の入り口を改め、その一間ぎりに出入りをやめて、(新可笑記、四・六〇〇頁)

c 大上戸の同行四人、いつとでも諸白、二斗切に呑みほしける。(好色一代女、五〇〇頁)

次に、動詞はいずれも「あり」(連用形)を取り、何かが「ある範囲(あるだけ)」を表す。全て「二」を伴う。

(7) お初尾の残りをありきりにとらせ、山崎よりの舟ちんなくて、(西鶴置土産、五一九頁)

キリが「キリノ」と述語名詞として使われている例もあげておく。いずれも十日間や五年間という「範囲」を表す。

(8) a 十日限の手懸者を置きて夜のなぐさみ(好色一代男、一・一二二頁)

b お娘の年も丸五年切り。給銀は金百両。さらりと手を打つた。(曾我会稽山、七三頁)

「その他」に分類したものは、次のような例である。

(9) a 約束の日限切れるも言い延ばし(冥途の飛脚、一・一二二四)

b 幾日幾日の日切りして、皆々宿所に帰りける。(曾根崎

心中、二・六〇)

(9 a) は、「日限」が切れるという名詞、(9 b) は「日切する」でサ変動詞のように使われているものである。この場合もやはり「範囲」を表している点には変わりがない。

以上の観察からキリはもともと時間的な「範囲」を表す名詞句を構成するものであり、この時間の範囲をもとに空間や数量に上接要素を拡張したものと考えられる。この時期のキリは上接要素や構文に関わらず、「範囲」を表す名詞句を構成すると言える(渡邊二〇〇二)。特に、助詞二を伴い、主節述語事態の成立する範囲を付加する連用修飾成分となる場合が多い。本論では、これをキリの最も初期段階の用法と位置付ける。

三・二・二 一七五〇年〜一八〇〇年代

一七五〇年代以降になると、上接要素の割合として指示語が増える。この時期は資料的な制約もあり総数が少ないため、割合は参考程度だが、六割以上を指示語が占めるのに対し、時間名詞は三割以下となっている。この期に見られる指示語への偏りは、江戸語においても同様の傾向があることから、キリの歴史において、一つの大きな特徴として捉えられる。指示語への偏りが、キリの史的展開においてどのような意味を持つのかについては四節で検討する。また、構文としては「キリデ」や述語名詞になる例が割合を増やし、相対的に「キリニ」の割合が低下する、という傾向を示す。

(10) a もはやおれが命もこれきりじゃ。(軽口はるの山)

b もしへあなたもふ是切(これきり)でよんどおくれなさ
らんじゃあるふナ(粋の曙、二九六頁)

三・三 江戸語におけるキリの変化

次に江戸語におけるキリの様相を確認しておく。

表2を見ると、一七五〇～一八〇〇年代の概ねの傾向は、上方語と類似しており、この段階のキリの展開は、上方語と江戸語を並行的に捉えることができると考えられる。しかしながら、一八〇〇年代以降は、先行研究でも繰り返し指摘される通り、上方語がキリを衰退させるのに対し、江戸語ではキリが何も伴わずに現れるようになること、タ形への接続が可能になること、という二つの大きな変化が起こる。

(11) a 真に受た振で葉をやつたら湯うのんで来るといつて往た
つきり今にうしやあがらねへ(深川新話、八・二二五頁)
b ゆふれい、ふつときへて、それきりこぬ。(青楼吉原咄、
一七・二一〇)

c 金のありきり。なくさつしやるか。(無頼通説法、八・
二九二頁)

表2 江戸語におけるキリの類型 ()内は割合

計	タ形	動詞	指示	数量	時間		
2 (6)			1		1	ノ	江戸I
4 (12)			4			ニ	
6 (18)			6			テ	
16 (47)			10	1	6	述語	江戸II
4 (12)	1	1	1			φ	
2 (6)					2	他	
34	1 (2)	1 (2)	22 (65)	1 (2)	9 (26)	計	
3 (4)			3			ノ	
16 (24)			16			ニ	江戸II
11 (16)	2		6		2	テ	
14 (21)	1		6	3	4	述語	
19 (28)	4	2	12			φ	
5 (7)	3		1	1		他	
66	10 (15)	2 (3)	44 (67)	4 (6)	6 (9)	計	

調査した範囲で最も早い「キリφ」、タ形への接続は、ともに一七七八、一七七九年であり、一七八〇年頃を境にキリは大きく変化したと見られる。「キリφ」の割合は、一八〇〇年代以降三割程度に増加し、指示語、動詞(「ありきり」のみ)、タ形には見られるが、時間名詞、数詞を取り「キリφ」となる例は見られない点に注意される。

上接要素としては、上方語と同様に指示語が六割以上を占めるという特徴がある。時間名詞は特に一八〇〇年代以降、一割以下に減少する。

四 指示語の変化とタ形接続

前節で見たように、キリの変化の特徴として、一八〇〇年代頃から上方語・江戸語ともに上接要素が指示語に偏る、という点があげられる。指示語の増加自体は、様々な先行研究で既に指摘されていることであるが、この指示語への偏りがキリの歴史にとつてどのような意味があるのか、という点についてはこれまで取り上げられてはこなかった。しかし、表1、2の示す通り、一七五〇年以降の上方語、江戸語において指示語は全体の六割以上を占め、構文の類型も広く、キリの使用例の中心をなす。このような中心的用法にこそ、次の変化を促す要因がある可能性が高く、詳しく検討する必要があると考えられる。本節では、指示語の増加で、キリがどのように変化するかを具体的にみていく。

四・一 指示語の内訳

表3は、キリが取る指示語の内訳である。

表3から指示語の中では「これ」が中心で、概ね六割程度、「それ」が三割程度を占めている。また「あれ」を取るようになるのは、一八〇〇年代以降の江戸語においてであるということがわかる。

表3 指示語の内訳

	上方Ⅰ	上方Ⅱ	江戸Ⅰ	江戸Ⅱ
計	6	14	22	45
他	0	この店1	ここ2	その時1 その晩1
あれ	0	0	0	5
それ	2	2	6	10
これ	4	12	14	28

この様相から、上接する指示語は、「これ↓それ↓あれ」と展開していったと考えられる。各期のそれぞれの用例をあげておく。

(12) a これぎりに女郎すて行くを(好色二代女、一・四一九)

b 是切で楽しんでこいと、金廿両やつてきたといふ(軽口

瓢金苗、八・一二〇)

(13) 主と家来との悲しさは。蹴飛ばされたらそれぎりに、張り込

みも言われぬ故。(双蝶蝶曲輪日記、六四六)

(14) もはやおれが命もこれぎりじゃ。(軽口はるの山、八・二九

一)

(15) そのお客がそれぎりによんでくださらぬによって。(箱枕、一

二二)

(16) それだけでもわたしがやうなものだから、もうこれぎりでお出なんすめへ(傾城買四十八手、一〇八)

(17) a そなたをやつたら大かたもはやそれぎりで帰るまい。

(諸鞆奥州黒、八・一九)

b もふ、それ切でかならず呑なんすなへ(遊子方言、四・

五〇)

(18) 万一これぎりで逢れない様になつたら、ぬしのかたみと心付て、(春告鳥、三八七)

(19) a 口半分にも出来なひ女だと思ひなんしたら、それこそ

最、夫限(それぎり)愛想を尽されて仕まふのも、誠に

悔しふざますは(春告鳥、五一七)

b へん、算盤は二丁之段ぎりだ。べらばうめ。それは始りだ

ア。夫ツ切か。(浮世床、二九三)

(20) あれぎり居所が知れぬ故、常不断旦那様と噂さ斗していたわいの(小袖曾我薊色縫、四二二)

指示語の内容は、事物の例が(12 b)(17 b)(19 b)の三例が数量の範囲、その他の「この店」「ここ」は場所を表しているほかは、大半が時間を表している。

四・二 指示語の変化が意味するところ

先述のように、キリはもともと時間の範囲の終点を表すのであるが、その時点のみを表すのではなく、あくまで「その時点までの期間」といった主節事態が成立する範囲を表している(15 a)

参照。指示語「これ」を取る場合、いずれも何らかの続いてきた事態があり、その最終時点が「今・この時まで」であることを表す。用例(21 a)ではこれまで継続してきた里通いをここまででやめること、(21 b)ではいまままで続いてきた命がここまでであること、といった解釈になる。

(21) a この里ふつとやめて、野郎ぐるひに仕替へんと思ひ定

め、(中略)これぎりに女郎すて行くを、(好色一代女、

一・四一九)

b もはやおれが命もこれぎりじゃ。(軽口はるの山、八・

二九二)

通常の時間名詞を取る場合と「これ」を取る場合では、いずれも何らかの「最終時点」をキリが取る点で共通しているが、時間名詞の場合はいくまで「範囲」そのものに視点があるのに対し、「これ」の場合、「今」までの「範囲」ではなく、視点は「今・ここ」といった特定の時点にあると言える。つまり、指示語「これ」の拡大は、キリが、「範囲」を表すものから、「最終時点」に特に視点がおかれることよって特定の時点を指すものへ変化したということを示していると考えられる。

このように指示語「これ」を取り特定の時点を指す用法ができたことを基盤として、さらに上接の指示語が「それ」拡大したものが(22)のような例であると考えられる。

(22) a 主と家来との悲しさは。蹴飛ばされたらそれぎりに、張り込みも言われぬ故。(双蝶蝶曲輪日記、六四六)

b 病の事をいへば女はづかしがりて、かさねてあそはず、
それ切にて縁きる、也。(野白内証鑑、一四九)

(22) の例で注目されるのは、「それ」は文脈を指示しており、それぞれ「蹴飛ばされる」「病の事をいう」という事態を受けていると考えられることである。全体としては、「それ」が指す事態が起こるといふ特定の時点⁽⁶⁾を継起として、「張り込みも言われぬ」「縁きる、」という主節事態が起こる、ということを表す。

このような特定の事態を受ける「それ」から指示語が「あれ」になると記憶指示となり、必ず過去の事態を受けることになる。

(23) 貴君に驚されるとは少しも気がつきませんでしたヨ。(中略)
それでも実に肝を潰しましたものを。若万一あれつきり私
が死んだらどうなさる。(春色連理の梅、二編卷之六)

(23) では、「あれ」は「貴君に驚され」た時を指していると考えられ、やはりその時点⁽⁷⁾を継起として「私が死」ぬという主節事態が起こることを表す。このような「特定の時点」を指す例は、指示語を取る場合に顕著にみられる。

キリがタ形を取る場合、やはり同様に「特定の時点」を「キリ」にすること意味する。

(24) これも旅で別れたぎり故、どこに今はござんすやら、居所さへも存ませぬわいな。(小袖曾我薊色縫、四二二)

このように他の上接語が範囲を表すのに対し、指示語とタ形をとる場合は、いずれも特定の時点のみを表わすという点で共通している。「特定の時点」という共通性を重視するのであれば、キリ

の展開におけるタ形への拡張は、指示語を取る場合からの発達を想定するのが妥当だと思われる。特に「それ」を取るようになったことが大きな要因になった可能性がある。先に述べたように「それきり」の「それ」は先行文脈を指し、事態そのものを受ける。この指示語の部分に指示内容の補文を直接取るようになったのがタ形を取るキリなのではないかと考える。

(25) a 幾個でも引かかり次第に姪戯で。「飽た」ら夫つきりよ
といふ。(花廻志満台、三編卷之中)

b 「それ」=「飽た」きり

「ありきり」の例を除いて、動詞を取る例がほとんど見られない状態で、一七八〇年頃の江戸語で突如タ形を取る例が出現する、という展開の早さも、このように考えれば説明がつく。

動詞自体を取ることは、確かに上方I期にすでに「ありきり」が見られることから、「動詞(句)」を取るという点を重視するのであれば、「ありきり」からの発達も考えられよう。しかしながら、「ありきり」自体キリの使用例の中では上方語・江戸語を通して少数しかなく、上方I期からル形および他の動詞に拡張した例が江戸語のタ形接続に至るまでほぼ確認できない。さらに「ありきり」は「あるだけ」「ある範囲で」という「範囲」の意味を表し、タ形接続とは意味的なギャップがある。これに対し、指示語の使用はキリの中心的用法であり、上方語・江戸語ともに活発に用いられており、かつ特定の「時点」を指すという点でタ形接続と共通する。

四・三 副詞句への変化

「ありきり」を由来と考えるもう一つのメリットは、元々名詞(句)として働いていた「キリ」が、「キリφ」の形で、副詞句となる、という文法上の性質の変化を、分量を表す遊離数量詞的段階を考えることで説明できる点にある。では、指示語の場合、副詞句への変化はどのように考えられるだろうか。宮地(二〇一一)でも指摘される通り、「キリφ」となる例は「ありきり」だけでなく、指示語を取る場合にも見られる。

(26) あれば有限ゆつかふといふ所さネ(浮世風呂、一三四)

(27) どふやら是切りφ逢れぬ様で(小袖曾我薊色縫、三二五)

江戸Ⅱ期では、「キリφ」の形で副詞句となるのは、調査の範囲では、指示語が十二例、「あり」が二例、タ形が四例である。

指示語を取る例は、分量では解釈できないので、遊離数量詞的性質によって副詞句となったわけではない。指示語を取る例が、「キリφ」となった背景には「キリニ」または「キリデ」の存在があると考ええる。「キリニ」「キリデ」は、述語に対する連用修飾句を構成するが、指示語を取る場合、前述の通り、特定のある「時点」を意味する。このためキリ句が時間副詞のような解釈を受けようになったのではないかと想定される。よく知られているように、時間名詞句(時間副詞句)は、助詞を伴う場合と、伴わない場合の両方があり、名詞のようにも副詞のようにも振る舞う。

(28) a 太郎に会った時二に／φ、借りた本を返す。

b 家を出た後二で／φ、忘れ物に気づいた。
指示語を取る例では、次のようなほぼ同様の文脈で「キリデ」と「キリφ」の両方が使われている。

(29) どふやら是切りφ逢れぬ様で(小袖曾我薊色縫、三二五)

(30) もし万々一。是ぎりで逢れねへやうにでも成いしたら。(花街寿々女、二七・二六八)

また、タ形を取る場合、多くは「キリφ」となるが、次のようにデを伴った例もみられる。

(31) 何処へ往ましたかしりませんと。言うたつきりで打捨て置たもんだから(花廻志満台、三編卷之中)

このように指示語を取る場合とタ形を取る場合の「デ」は、付いても付かなくてもよい要素であったことが見て取れ、このような特徴は、先にみた時間名詞(副詞)句の特徴とよく似ている。これらの観察から、「指示語+キリφ」(「タ形+キリφ」)が時間名詞(副詞)句と同様の解釈を受けることで生じたものとしても矛盾はない。

以上のことから、本論では、キリの史的展開においてタ形接続の用法は、「指示語+キリ」の用法から派生したと考える。

五 まとめ

本論では、現代語に見られるキリの多様な用法のうち、特にタ形に接続する用法の成立について考察した。本論で述べたことは次の通りである。

①タ形への接続は、「それ+キリ」のような、文脈から特定の事態を受ける指示語の例から、指示語の部分に直接事態を取れるようになったことで成立した。

②副詞句への変化は、「指示語+キリ」(タ形+キリ)句が時間副詞句のような解釈を受けることで発生した。

本論では、「ありきり」を除く(1c)のような「動詞連用形+キリ」の例を検討しなかった点が大きな問題として残る。連用形+キリには、次のようにタ形+キリとよく似た例も観察される。

(32) たとへ今日が日。御縁がきれても。一生別れきりといふではなし。(仮名文章娘節用、後編下巻)

今のところ、このような連用形+キリの例は、複合動詞「〜キル」の連用形名詞からの派生であり、本論で検討した「名詞+キリ」とは別の系統であると考えている。複合動詞「〜キル」は非常に古くから見られるもので、近世期に「完全に〜する」という完遂の意味を表すようになるという(青木二〇一〇)。(1c)で見た「任せキリ」のような「連用形+キリ」は「〜したまま」のように解釈されるが、これは完遂の意味からの派生ではないかと考えられる。また、近世期には、次のような「全部〜する」といった意味の「連用形+キリ」名詞句が頻繁に見られる。

(33) 浪こどもに借りきりの小舟、和田の御崎をめぐれば(好色一代男、一・三七)

このような例では、本論で検討した「名詞+キリ」と同形になるだけでなく、用法や意味の面で似通ったところがあり、互いに

強く影響を与え合ったのではないかと想定される。実際、複合動詞「〜キル」は連濁を起こすことはないが、近世後期には次のような例が見られ、これは「名詞+きり」との混乱例とみられる。

(34) 此家へ被為入りきりに被成て(春色連理の梅、初編巻之三)

特に「ありきり」は、複合動詞「〜キル」との関係で考えるべきなのかもしれない。今後の課題としたい。

【付記】本研究は、科研費19K00638、19H01262の助成を受けたものである。

注

(1) 明治期まではギリが優勢である。岩崎(一九七二)によれば、大正時代に「ぎり」から「きり」への交替が始まり、昭和二〇年代を境に「きり」優勢に転換するとされる。

(2) ⑥は、主に関東地方に見られる「しか」相当の用法であり、本稿の(1)には用法として掲載していない。

(3) タ形への接続については、宮地(二〇一一)においても慎重な態度を取っており、「観察に留まり答えを持たない」「江戸語の構造的特徴と考える余地が大きい」(二三二～二三三頁)と述べられている。

(4) 用例収集に際して、「指キリ」「蕎麦キリ」「巾着キリ」のような動詞「切る」の意味が明白にある複合名詞は除外した。また、「丸(っ)きり」「首(っ)きり」のような慣用表現もカウントしていない。「買いキリ」のような「動詞連用形+きる」の複合動詞の連用形名詞は別途扱う。

(5) 時間名詞の中でも「今日」を取る場合(上方Iにおいて二例の

み)には、「これ」同様に特定の時点を指すと言える。範囲を表していたものから、特定の時点へのフォーカスといった変化は、指示語「これ」を取るようになったこと自体が要因となっているというわけではなく、キリの拡張の流れの中で、指示語「これ」を取る場合に特に顕著にその傾向が現れた、とみるべきかも知れない。

(6) 「それ」は名詞であるが、何らかの名詞を受けるのではなく、補文相当を受けていると考える。「それ」が補文を受けることについては、近藤(二〇〇〇)に言及がある。また、矢島(二〇一三)では、近世期に前文脈を受ける接統詞的な「ソレナラ」が多用されることが指摘されている。よって、「ソレ」が文相当を指示する可能性は十分に考えられる。

(7) 「冥途の飛脚」に「夕霧」と「言ふぎり」をかけたと思われる例があるが、キリの例とみるべきかどうか難しい用例である。

(8) 調べた範囲では、夕形に「二」が接統した例は見られない。

【調査資料・使用テキスト】

『日本語歴史コーパス』(洒落本・人情本) 国立国語研究所 (2021) パーシモン2021.3 <https://cedninja.ac.jp/ch/> 『断本大系』(東京堂出版) 国文学研究資料館 断本大系本文データベース (<http://basel.nijl.ac.jp/~hanashon/>) 新編日本古典文学全集『井原西鶴集』、『近松門左衛門集』、『浄瑠璃集』、『浮世草紙集』、『黄表紙』、『洒落本・滑稽本・人情本』(小学館) ジャパンナレッジ (<https://japanknowledge.com/pnsl/search/koten/index.html>)

新日本古典文学大系『上方歌舞伎』『江戸歌舞伎』『浮世風呂』(岩波書店)、日本古典文学大系『江戸歌舞伎』(岩波書店)、『歌舞伎台帳集成』(勉誠社) (※江戸上演のもののみ) 第一巻「心中鬼門角」(一七二〇) 第七巻「面影砥水鏡」(一七四六) 第八巻「諸鞆奥州黒」(一七五二) 『男伊達初買曾我』(一七五九) 第九巻「由良千軒蟾兔湊」(一七五四) 第

三十巻「御攝勸進町」(一七七三) 第三十六巻「国色和曾我」(一七七八) 第四十三「玉櫛笥曾我」(一七四七) 第四十四巻「仇名かしく」(一七七七) 『洒落本大成』4〜7 (中央公論社)、

【参考文献】

青木博史(二〇一〇)『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房

岩崎慎子(一九七二)『きり』(きり)『考』『女子聖学院短期大学紀要』

五、一五―三四頁

倉持保男(一九六九)『きり(ぎり)―副助詞(現代語)』『古典語現代語助詞助動詞詳説』(学燈社)

此島正年(一九六六)『国語助詞の研究―助詞詞素描』桜楓社

近藤泰弘(二〇〇〇)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房

宮地朝子(二〇一三)『名詞キリの形式化と文法化』『日本語文法の歴史と変化』、二一五―二三八頁、くろしお出版

矢島正浩(二〇一三)『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院

湯澤幸吉郎(一九三六)『徳川時代言語の研究』刀江書院

渡邊ゆかり(二〇〇二)『付属語「きり」の用法の変遷について―江戸語・東京語を中心に―』『日本語科学』十二、二二八―二五二頁

(いわた・みほ 就実大学准教授)